

(1) 死は、人間にとっての最大のテーマ

- [1\) 死は、人間にとっての最大の悲しみ・不幸・悲劇・恐れ](#)
- [2\) 死の問題解決と宗教の使命](#)
- [3\) 死生観は人間の生き方を決定する](#)

1) 死は、人間にとっての最大の悲しみ・不幸・悲劇・恐れ

“死”という厳粛な宿命

死は、人間にとっていつか必ず訪れる宿命であり、誰も避けることはできません。先ほどまで息を温かかった肉体が徐々に冷たくなっていく様子を前にしたとき、人はこれまで味わったことのないような思いに打たれ、神妙な気持ちになります。死の前では誰もが厳粛にならざるをえなくなります。

先ほどまで息をしていた人間と、死体となった人間の間には大きな違いのあることは分かりますが、では何がどのように違うのかということになると、途端に説明できなくなります。外見上は、生きている人間も、生命を失った死体も違いはありません。体重は1グラムも変わっていないはずで

しかし、どんなに呼びかけても死んでしまった人からは、もはや返事は返ってきません。「生きているということ、生命があるということは、どのようなことなのだろうか?」「先ほどまで存在していた生命は、どこへ行ってしまったのだろうか?」と考えざるをえなくなります。

人間にとって一番の悲しみ

人間にとって一番の悲しい出来事は、自分が死ぬことより、愛する人との死別であると言われる。愛する人との死別は必ずやってくることを知りつつも、誰もがその時を迎えると悲しみに打ちひしがれることとなります。

人生において体験する出来事の中で、最もストレスを与えるのは、愛する人との死別です。愛する人との死別がショックとなり、身体に不調・病気を引き起こすこととなります。死別の悲しみからなかなか立ち直れず、生きる意欲を失って自殺を図るような人もいます。

人間にとって一番の不幸

大半の人間にとって一番の不幸な出来事は、死別であり自らの死です。地上人生では、さまざまな困難やトラブルを体験しなければなりません。一生涯、辛くて嫌な出来事と遭遇しないというような人は、ほとんどいないと言ってもいいでしょう。誰もが何らかの問題や不幸を抱えています。人生は思うようにいかない辛いものだと、皆が考えています。

そうした不幸の中でも“死”は、最大の不幸です。病気や倒産は何らかの対処の仕方がありますが、死に対しては一方的に受身にならざるをえません。闘病生活の果てに死に至ることは、人々にとって最大の不幸となります。事故や戦争に巻き込まれて死ぬことも、最大の不幸とされます。そうしたとき人々は愛する人の生命が失われたことを嘆き悲しみ、その死を悼みます。

人間にとって一番の恐怖

人間にとっての恐れとは、言うまでもなく死を迎えることです。人間はいつか必ず死ぬ存在であることは理屈のうえでは知っていますが、自分の死を平然と迎えることのできる人間はそれほどいません。死が迫るにつれ、死んだ後はいったいどうなるのか、靈魂になるのか、死後の世界というような場所はあるのか、あるいは死とともに完全に消滅してしまうのか、死ぬときはどのような苦しみを味わうことになるのか……と考えるようになります。しかし、こうしたことをどんなに考えても答えは出てきません。死にまつわる問題を考え始めると、じっとしていられなくなります。

「死を恐れる」ということは、すべての人間に共通する事実なのです。現代人であれ昔の人々であれ、発展途上国の人間であれ先進国の人間であれ、人間である以上、誰もが抱く自然な気持なのです。死の恐怖から逃れようと不老長寿の薬草を求めた秦の始皇帝の話は、そうした事実を物語っています。多くの人々が死を恐れ、何とかこの宿命から逃れたいと考えています。

現在では、何億というお金をかけて臓器移植を受け、少しでも延命を図ろうとする人がいますが、それもできるだけ死から逃れようとする人間の抵抗なのです。いつかは必ず敗北の瞬間がくることを知りながらも、わずかでも寿命を延そうとしているのです。そこにあるのは“生命こそが一番の価値あるもの”という考えです。そして死は一番の恐ろしい出来事であり、何としても避けたいという「死の恐怖」なのです。

2) 死の問題解決と宗教の使命

死という宿命的な不幸・悲劇・悲しみ・恐怖の解決法を、人々は宗教に求めてきました。人々は宗教にすがって死の苦しみを少しでも和らげ、救いを得ようとしてきました。地球上のすべての宗教が、死の問題と関わりを持っています。死の問題を取り扱わない宗教は存在しません。人々は宗教に「死の恐怖」からの救いを期待しているということなのです。

宗教から死と死後の世界に関する内容を取り除いたなら、それは単なる倫理・道徳の類になってしまいます。人間は、神や正しい生き方を知りたいと思うよりも、死の恐怖を真っ先に取り除いてほしいと願うものです。そこに宗教への期待と依存が発生します。

本来、生きている間に悟りを得るといふ生者のための宗教であった仏教も、日本をはじめ中国では、死者のための宗教に変わってしまいました。仏教の教えによるならば、もともと“墓”などというものは不要であるはずにもかかわらず、実際には墓のない寺は存在しません。

キリスト教徒は、終末におけるイエスの再臨によって肉体の復活にあずかり、永遠の生命を得るようになるかと信じてきました。イスラム教徒は、イスラムの教えに忠実に歩むことによって死後は天国で楽しく過ごすことができるようになるかと信じてきました。特にジハードにおいて殉教した者は、天国での特別な生活が保障されると信じ、現在の自爆テロを引き起こすことになっています。

古代エジプトにおける宗教では、輪廻転生によって死の問題の解決が図られ、その思想に基づいて、死者はミイラにされて墓に葬られました。原始宗教と言われるシャーマニズムは現在でも世界中に存在しますが、そこでは死によって靈魂が肉体から離れると考えられてきました。シャーマンの呪術によって死者の魂は地上に戻ることができる信じられてきました。

このように宗教と死とは、一体の関係にあります。それどころか宗教とは、大半の人々にとっては死に対処するための拠りどころであり、自分の死と身内の死者にとっての救済所であり、人生の一部になっていると言えます。

人類の歴史を通じて、人間のいる所には必ず宗教が存在したと言えます。もし宗教がないとするなら、人間は心の拠りどころを失い、不安に駆られてまともな生活を送れなくなっていたはずで

3) 死生観は人間の生き方を決定する

死に対する考え方は、その人間の生き方のすべてを決定するようになります。“死とともに人間は無に帰してしまう”と考える人間がいます。科学の発達した現在では、神や死後の世界や宗教を一切否定する唯物論者がいます。人間の心の性格から見て、そうしたものをきっぱりと否定してしまうには、よほどの無理をしなければなりません。しかし表面上は“自分の理性が納得できない”ということで、唯物論を受け入れるのです。

そうした人間は、生きている間にできるだけ人生を楽しもうと思うようになります。多くの場合その楽しみは、肉体的快楽を追求する方向に向かっていくことになります。おいしいものを食べ、好きなことをして遊び、文明の利器を活用して最大限のレジャーを求め、あちこちと旅行をして人生を楽しもうとします。その際、こうした楽しみや快楽を与えてくれるのがお金であるため、人生の目標はお金儲けになってしまいます。お金を儲けて本能的快楽をとことん求めることが、人生のすべてになってしまいます。“お金こそすべて”という物質的価値観に支配されることになり、拝金主義に陥ってしまうのです。

一方、お金がなくて人生を楽しむことができない、そのうえ毎日苦しいことばかりが続くというような状況に置かれると、生きていくこと自体に意味と価値を見出すことができなくなります。そして「生きていても苦しむだけ、少しばかり長生きしようが早死にしようが同じだ。いずれ死ぬことになるのだから、いっそのこと早く死んだ方がいい」と考え自殺に走るような人間も出てきます。

死生観は、個人の生き方を決定するばかりでなく、医療などの社会全体に対しても決定的な影響をもたらします。死によってすべてが消滅する、人間としての存在がなくなってしまうとするなら、“生命があることこそが一番尊いことである”ということになります。そうした考えに立つ医学では、生命を少しでも永らえさせることに価値があると思うようになります。医学は、病気を治して死を先延ばしてきたときに勝利とされ、患者の病死は最大の敗北となります。そうして医学は、ひたすら人間の寿命を永らえさせることだけに奔走するようになるのです。今では医学の名のもとで“臓器移植”が行われ、莫大なお金をかけて“延命治療”が施されるようになっています。患者の身内は、お金をかけることによって少しでも生命を延ばそうと考えるのです。現在の医学は、こうした方向に向かって走り続けています。その背景には「死は、最大の不幸であり損失であり悲しみである」という共通の見解があります。

一方、宗教において見られるように「死によって人間は存在を消滅させることはなく、死後もあの世において生き続ける」と考える場合、死はこの世からあの世に向けての移動ということになります。それは確かに悲しい別離ではあっても、完全に消滅してしまうのではないなら、考えも変わってきます。そうした宗教的思考をするならば、“楽しみがない”というだけで人生に絶望して自殺するというようなことはなくなります。また無意味な延命治療を、いつまでも続けるというようなこともなくなります。

死をどのように考えるのか、特に死によってすべてが消滅すると考えるのかどうかによって、人生に対する姿勢が根本から変化することになります。

(2) 死の正しい定義

- [1\) 脳死は人間の死ではない](#)
- [2\) スピリチュアリズムの“死の定義”](#)

1) 脳死は人間の死ではない

脳死を死の基準とする現代医学

人間にとっての最大の悲劇である“死”について、現在は明確な定義が確立されていません。一昔前ならば死とは、呼吸が止まり、心臓の鼓動が停止し、瞳孔が開くといった肉体的変化を判断基準にすればよかったのですが、“臓器移植”が行われるようになって、より早く臓器を取り出し移植した方がよいということから、死の判定をめぐるさまざまな議論が巻き起こるようになってきました。

臓器移植に反対するスピリチュアリズムでは、何もせずに様子を見ているだけでよいということになりますが、臓器移植にこだわる現代医学は、そうした人間の自然な死を認めようとしません。そこで医学は、人間の死とは“脳死状態”であるとの基準を打ち出しました。心臓が鼓動していても、呼吸をしていても、脳死状態になれば、いずれ時間の経過とともに完全な死に至ると判断しているのです。脳死状態を人間の死と認定し、臓器移植をしやすいようにしたのです。

脳死は人間存在の終わりではない

唯物科学では、人間の意識や人間性は脳によって作り出されるという考え方をします。脳によって理性ある人格が形成され、脳が働いている間だけ人間らしくいられるとの見解に立っています。そうした考え方は、“脳死”という脳の機能の停止をもって人間性や尊厳性が消滅することを意味するようになります。スピリチュアリズムのように死後の生命の存続を認めない以上、脳の死は、人間性と人格の終焉ということになるのです。

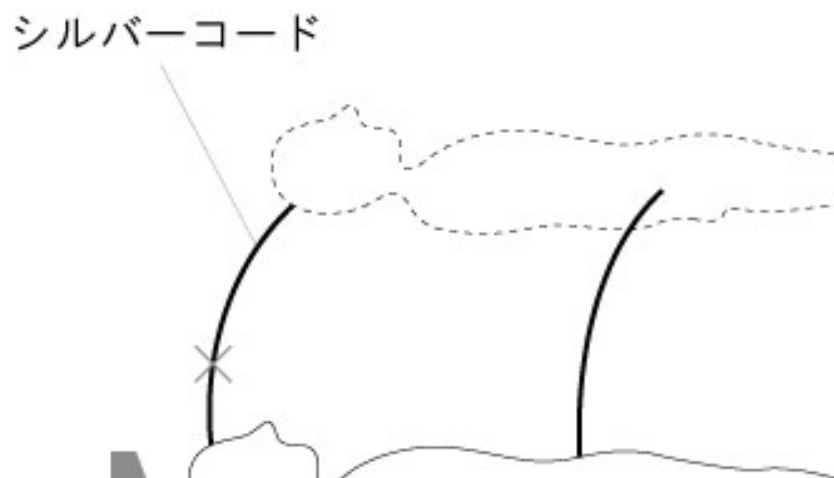
スピリチュアリズムでは、たとえ脳の機能が停止しても、それは人間の物質次元の構成要素の1つが不全になったにすぎないと考えます。霊的次元では、知的生命活動が変わりなく続けられています。脳の機能が停止したとしても、人間を構成する霊的部分には何の変化もなく、しかもその霊的部分は依然として肉体部分と一体関係を継続しています。霊体と肉体を結ぶシルバーコードが切れて、すべての肉体機能が完全に停止しないかぎり、人間としての尊厳性・価値は消滅しません。

タイプライターのキーが故障して使えなくなったからといってタイピストが死んだとは言えないのと同じで、脳が損傷して使えなくなったからといって人間(霊)は死んだとは言えないのです。別の次元(霊的次元)で人間は、しっかりと生きているのです。

脳死であっても生き続ける事実がある

脳死に至れば、特別な延命装置に頼らないかぎり、いずれ死を迎えるようになるということが医学関係者の了解事項になっています。したがって脳死は、肉体の死と同じ意味を持つこととなります。ところが脳死状態に陥りながら、その後、長期にわたって生き続ける“長期脳死”といった事例が存在することが明らかにされるようになってきました。瞳孔が開いたままで脳波もない子供が、1ヶ月以上も、時には何年間も生存することがあるのです。脳死判定で無呼吸テスト以外のすべての検査で脳死の要件を満たした子供が、6年以上も生き続け、その間に身長は伸び体重も増加するといったことが実際に存在するのです。

こうした事実は、脳死を人間の死と認定することが間違っていることを示しています。脳死の判定後、それほど時間を置かずに確実に死を迎えるというのであれば「脳死」イコール「人間の死」という主張は論拠を持つこととなりますが、実際にはそうした大前提に反する事実が見られるのです。脳死を人間の死と決めつけ、生きた肉体から臓器を取り出して死に至らしめる行為は殺人と同じこととなります。脳死を一律に死と認めるならば、植物人間・重度脳障害者にもそうした認識が及んでいく危険性ははらんでいます。



* 脳死とは、頭部のシルバーコードが切れるか、つながってはいても脳の障害で「霊的エネルギー」が得られない状態のことです。別のシルバーコードはつながっているので、生理機能は維持されることとなります。

2)スピリチュアリズムの“死の定義”

脳障害による意識障害は、靈魂の存在を否定したことにはならない

唯物主義に立脚する近代科学は、心を脳という物質の産物と定義します。心とは、脳内にある百兆もの神経の電気経路から生じる随伴現象であると考えます。これは脳が先で心は後、心は副次的な存在であり、脳を離れては存在し得ないということの意味します。

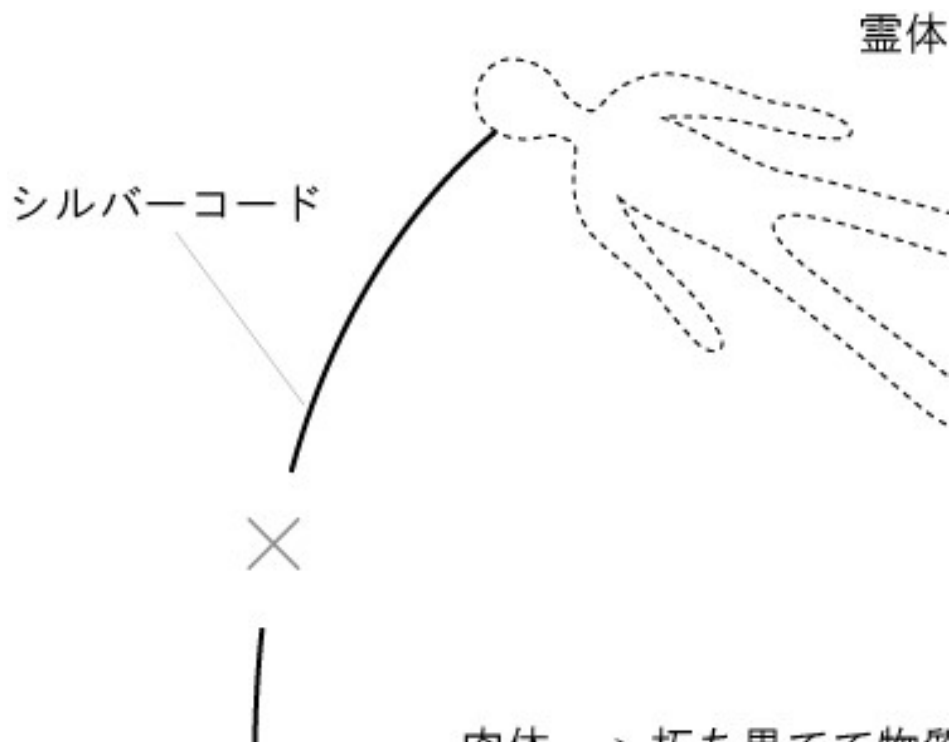
近代科学では、こうした自分たちの見解の正当性を主張するために、脳に損傷を受けると精神に異常をきたしたり記憶が失われるといった症例を挙げます。また薬物や物理的刺激によって精神状態が変化したりさまざまな精神障害が生じること、さらには脳の一部を刺激することによって幻想や幻聴が作り出されるといった事実を取り上げます。

意識(心)が脳に依存していることは事実ですが、それをもって意識が脳の活動の随伴現象であるという理由にはなりません。そうした事例は、心が脳の産物であるという証拠にはなりません。なぜなら脳から独立した「霊魂」が存在し、そこから発せられた情報・意識内容が「脳」という受信器によって受信され、脳から再発信されるという可能性も考えられるからです。こうした想定が正しいならば、脳の障害がさまざまな精神症状を引き起こしたとしても何の矛盾もありません。

“死”とは、シルバーコードが切れる瞬間のこと

スピリチュアリズムでは、人間の死をどのように考えているのでしょうか。脳死を“死”と認定してもいいものなのでしょうか。結論を言えば、スピリチュアリズムでは霊的事実から人間の死とは、霊体と肉体を結んでいたシルバーコードが切れることであると定義しています。

大半の先進国では、脳死を人間の死と定義しようとしています。しかしスピリチュアリズムの観点からするならば“死”とは、「霊体と肉体を結ぶシルバーコードが切れる時」のことなのです。シルバーコードが切れていないうちは、いったん死んで後に生き返るというようなことが起こる可能性があるのです。ですから正しい“死の定義”とは脳死ではなくて——「シルバーコードが切れる瞬間」ということになります。



脳死を、霊的視点から見ると

霊体が肉体から離れた後にも、しばらく肉体のある部分が生き続けることがあります。また脳死のように、脳の働きは失われたのに肉体は依然活発に活動しているといったこともあります。これを霊的視点から見ると次のようになります。

シルバーコードといっても太いものからクモの巣状の細いものまで、さまざまあります。これらのシルバーコードは、一律に切れるのではなく、場所によってそれぞれ異なります。どこかが切れていても、他の部分はしっかりとつながっていることもあります。先に述べたような状態は、シルバーコードが霊体と肉体を部分的につないでいるようなときに発生します。

霊体と肉体の頭部をつなぐ太いシルバーコードが切れたり機能を停止すると、霊体から脳へのエネルギーの補給が閉ざされます。これが“脳死”の状態です。その際、まだ腹部をつなぐ太いシルバーコードがつながっていると、脳死状態であっても肉体は活発な活動を維持することになります。反対に腹部をつなぐ太いシルバーコードが切れ、頭部のシルバーコードがつながっている状態のときには、意識はしっかりとしているものの肉体の機能は失われているということになります。

脳死の最中でも、人間はさまざまな体験をしている

唯物主義の立場からすると、脳が働かなくなり植物状態になった人間は、人間としての“死”を迎えたこととなりますが、それを霊的視点から見ると全く違って映ります。確かに脳は機能を停止していますが、霊体の中で霊的意識（霊の心）は、さまざまな意識活動をしています。すべてのシルバーコードが切れて本当の死に至るまで、霊的次元でいろいろな体験をしているのです。脳死状態で、霊的意識（霊の心）は苦しみを通して「カルマ」を清算していることもあります。こうした体験が本人の「霊的成長」にとって必要なプロセスになっていることもあります。

肉体は脳死状態であっても、完全に死んでいるわけではなく、どこかのシルバーコードがつながっているのが普通です。それが脳死状態の中で徐々に切り離され、本当の死に向かっているのです。その最中に突如、肉体の生命を奪ってしまうことは「霊」に少なからずショックを与えることとなります。自然の死のプロセスが遮断されて、無理やり引き離されることになるからです。もっともすでに死に向けてのプロセスが進行中である場合は、自殺や不慮の事故死ほど大きなショックを受けることはありません。その後の調整にも、それほど時間はかかりません。

(3) 死のプロセスの諸相

——シルバーコード切断のさまざまなケース

死とは、霊体と肉体をつなぐシルバーコードが切れる瞬間のことですが、このシルバーコードの切れ方は、一人一人でも違っています。すばやく切れる人、なかなか切れない人、スムーズに切れる人、ぎこちなく切れる人といったように千差万別です。すなわち死に方には、人それぞれ異なる様相があるということなのです。シルバーコードの切れ方、すなわち死に方を決定するのが、本人の霊的成長のレベルであったり、地上人生における意識の持ち方や生き方です。本人の魂の状態によって、死に方がさまざまになるということなのです。

一般的に言って、霊体と肉体の結びつきが強い人ほどシルバーコードを断ち切るための時間は長くなり、苦痛も大きくなります。反対に霊体と肉体の結びつきが弱い人、すなわち霊的成長をしている人は、シルバーコードの切断が自然に、何の苦痛もなく進行していきます。そして“死”はきわめて穏やかなプロセスとなり、“死の眠り”からもすばやく覚醒します。

ここではシルバーコードの切れ方を中心にして、さまざまな死の様相を見ていきます。

- [1\) 自然死の場合](#)
- [2\) 霊性の優れた人の場合](#)
- [3\) 物質的・本能的な人の場合](#)
- [4\) 急な事故死や非業の死を遂げた人の場合](#)
- [5\) 自殺者の場合](#)

1) 自然死の場合

老衰による自然死の場合は、生命力が徐々に衰え、それとともにシルバーコードも少しずつ自然な形で切れていきます。完熟した果物が木から離れて落ちていくように、スムーズに死のプロセスが進むこととなります。

2) 霊性の優れた人の場合

霊性が優れ、日常生活での関心事が物欲から超越しているような人は、地上にいながらにして霊界での生活を送ってきています。そうした人の霊体と肉体の結びつきは弱くなっていて、心臓が止まればただちにシルバーコードが切れるようになります。死のプロセスに苦痛を感じることは、ほとんどありません。

死にともなう意識の混濁もあまり生じず、わずかにまどろむ状態を経て、すぐに目を覚ますようになります。幸福感・至福感に満たされる中で、死のプロセスが進行することもあります。人によっては死の眠りに陥ることもなく、自分の死の状況を明晰な意識で見つめていることもあります。

3) 物質的・本能的な人の場合

人生を本能的・肉欲的に生きてきたような人、霊的なものに無関心で物欲に翻弄されてきたような人は、霊体と肉体の結びつきがきわめて強くなっています。そのため死に臨んでも、シルバーコードがなかなか切れません。死が近づくと、シルバーコードの切断が始まりますが、多くの場合、困難が生じます。霊体と肉体の分離に長い時間がかかり、シルバーコードの切断に苦痛がともないます。

4) 急な事故死や非業の死を遂げた人の場合

事故などで急死するような場合、霊体と肉体の分離の準備が全くなされていないために、複雑な状況が展開することになります。この場合でも本人の霊的成長の度合いや日常生活での霊的意識の持ち方が、結果を大きく左右することになります。

大半の場合、本人は突然の出来事に対応できず、茫然自失の状態に陥ります。しばらくの間、「自分は生きている」と思っています。霊体になった自分の姿を見ても依然、地上に生きていると思っているのです。

しかしその後は、霊的成長の進んだ人とそうでない人では、大きな違いが生じます。霊性の優れた人の場合は、周りの環境の変化から、自分が不慮の事故で死んだことを悟るようになります。特に生前から「霊的真理」を知っていた人は、短時間のうちに自分の死を悟るようになります。しかし肉欲的な生活をしてきた人間は、いつまでも自分の死を自覚することができません。

5)自殺者の場合

自殺者の場合は、霊体と肉体が特に強く結びついているので、シルバーコードがなかなか切れません。そのため肉体の苦しみがそのまま霊体に伝わり、激しい苦痛・死ぬような痛みを味わうことになります。この苦しみ・痛みは、神から与えられた生命と霊的成長のチャンスを、自ら捨て去った罪に対する罰となっています。言うまでもなく、それは「カルマの法則」のもとで引き起こされた結果です。

(4)スピリチュアリズムがもたらす死生観の革命

スピリチュアリズムは、人類史上初めて死の実相を明らかにしました。スピリチュアリズムによってもたらされた「霊的真理」は、死に関する従来の宗教の見解を根本から覆したばかりでなく、人類から死に対する恐れや不安を完全に払拭することになりました。スピリチュアリズムは、地球人類の「死生観」に根本的変革を引き起こしたのです。

ここでは、そうしたスピリチュアリズムがもたらした死生観の革命的变化について見ていきます。

- [1\) 死の意味の革命的变化](#)
- [2\) スピリチュアリズムの死生観は、地上人類の「人生観」に根本的変革をもたらす](#)
- [3\) スピリチュアリズムの死生観は、地上人類の「人間観」に根本的変革をもたらす](#)
- [4\) スピリチュアリズムの死生観は、地上の道德・法律・医学に根本的変化をもたらす](#)

1)死の意味の革命的变化

スピリチュアリズムは、地球人類の死に対するこれまでの常識を根本から覆しました。スピリチュアリズムが明らかにした死の意味は、次のような画期的なものです。

①死は、霊の世界への新たな誕生

シルバーコードが切れると肉体は土に返り、霊体は霊界で新しい生活を始めるようになります。人間は死によって消滅するのではなく、霊体をまとった「霊」として生き続けます。つまり“死”とは——「霊の世界への新たな誕生の瞬間」ということになります。死は、旅の一時的な逗留先であった地球から、霊にとって本来の永遠の住処である霊界に帰っていく出航の時なのです。

地上に生まれた赤ん坊は、へその緒が切れて初めて一個の独立した地球人類となります。一方、人間は、シルバーコードが切れて初めて霊界の一員となるのです。

②死は、自然現象の1つにすぎない

肉体は、「霊」が地上という物質世界で生活するための乗り物にすぎません。70～80年の間使用する物質の道具なのです。私たちの霊・霊の心・霊体は、肉体という乗り物に乗って100年にも満たない短い物質世界での人生を送ります。そしてその短い地上人生の間に、人間は霊界に行くための準備をすることになります。

肉体は機械と同じで必ず、すり切れて動かなくなる時がやってきます。いつまでも使用し続けることはできません。いずれ寿命が尽きるようになります。肉体の使用期限、それが肉体の寿命なのです。したがって肉体の死は、自然現象の1つにすぎないということになります。

もし神が人間を、肉体を持ったままで永遠に生き続ける存在として造られたならば、肉体には寿命というものはなかったはずですが。しかし人間が永遠に生きる場所を地上ではなく霊界とされたために、「肉体の死」が存在するようになりました。神は「肉体の死」と同時に、「霊界」という永遠の住処を準備されたのです。

物質界の森羅万象は常に変化し、いつまでも同じ形を維持し続けるものはありません。万物は常に変化し移り行くものとして創造されました。釈迦（シャカ）が発見した“諸行無常”という法は、物質界における神の法則の1つなのです。したがって物質である人間の肉体も自然界の存在物と同様に、そうした神の法則の支配から逃れることはできません。

歴史の中には、肉体を持ったままこの世に生き続けることができるとする教えや宗教がありました。キリスト教は、クリスチャンは終末にイエスの復活にあずかり、肉体が復活して永遠に生き続けるようになると教えてきました。しかし絶対にそうしたことはなりません。また道教が理想とする不老不死というような奇跡も決して生じません。「肉体の死」は、自然界の現象の1つであり、神が決められた摂理である以上、必ずやってくるものなのです。

③死は悲劇ではなく喜びであり、祝福すべき出来事

死は、大半の人々が考えるような悲劇ではありません。死は、恐れるような出来事ではありません。神は、人間が永遠に生きていくための素晴らしい住処として霊界を造られているからです。死は、苦しみの多い物質世界から、美と光に満ちあふれた霊的な世界への旅立ちです。それは本当に喜ばしい出来事なのです。スピリチュアリズムが人類にもたらした福音とは、死は素晴らしいものであるということを明らかにしたことです。スピリチュアリズムは、これまでの死にまつわる常識を覆しました。「死生観の革命」を引き起こしたのです。

地上の宗教の中には、死後も人間は生き続けるということを説くものが数多くあります。しかしスピリチュアリズムのように、死は素晴らしい出来事であるとまで断言しているような宗教はありません。「死は喜びであり、祝福すべき出来事である」——これはスピリチュアリズムが初めて明らかにした福音なのです。何千年にもわたる死の恐怖を根底から覆し、何ひとつ死を恐れる必要のないことをスピリチュアリズムは証明したのです。

皆さんも何十年か後には必ず死ぬこととなりますが、その時を、今から楽しみにしてもよいのです。「死を人生のご褒美として迎えるために、できるかぎり価値ある歩みをしよう！」——そんな気持で地上生活を送ればよいのです。死後の世界の存在を知ることによって地球人類の意識、特に「死生観」に根本的な変化が訪れるようになります。

④死の時期は、生まれつきおおよそ決定している

スピリチュアリズムは、死後の世界の存在や死が素晴らしい出来事であることを明らかにしたばかりでなく、さらに驚くような内容も伝えています。それは「地上に誕生した人間の寿命は、生まれつきおおよそ決まっている」ということです。もちろん脳の意識（顕在意識）ではそれを知ることはできませんが、霊の意識（潜在意識の深層）では、しっかりと自覚しているのです。人間が地上に再生する目的の1つは、前世でつくった「カルマ」を清算することです。カルマという前世で犯した罪を、地上での苦しみの体験を通して償い清算するということです。再生者は地上に生まれる前に、自分の地上人生での試練の内容とおおよその人生行路を決定します。その際、寿命についての大枠も決められるのです。

ここで寿命の大枠（おおよその寿命）と言ったのは、霊界での決定が、必ずしもその通りに展開しないことがあるからです。たとえば“自殺”などがそうです。自殺が再生人生に予定されることはありません（*地上への再生で“自殺”の可能性は考えられたとしても、それは「努力によって避けるべきもの」という前提のもとで再生に踏み出すこととなります）。自殺は、すべて地上人の自由意志の悪用と意気地のなさによって引き起こされる間違いです。人間には神から自由意志が与えられていて、常に善を指向するのかマイナス方向を指向するのかの選択権があるのです。地上人生はこうした「自由意志による選択」と、霊的成長のための「カルマ清算」という大きな要素を軸にして展開していきます。そのため再生以前の決意がその通りに実現せず、失敗に終わることもあるのです。

こうした事情を含めたトータルとして、地上人生における寿命はおおよそ決まっているということになります。現実の寿命は、霊的・精神的・物質的・地上的なさまざまな要因によって決定されます。寿命には、ありとあらゆる要素が絡んでいます。そうした事情を考慮したうえで大抵の場合、人生の大枠・おおよその寿命は前もって決まっているということなのです。

飛行機事故などで一度に大勢の人間が死ぬと、神が寿命が尽きてもうじき死ぬべき人間をまとめて飛行機に乗せ、事故を起こさせたと思うかもしれませんが、そういうことはありません。事故で死んだ人には寿命が尽きる時がきていた（大枠としての寿命の終わりがきていた）ということはいえますが、その日・その時間に飛行機事故で死ぬということが決められていたわけではありません。さまざまな要因（霊的・精神的・物質的な要因）が絡んだ結果として、飛行機事故で死ぬことになったのです。死ぬべき時がきている人間は、飛行機事故でなくとも、いずれ近い時期に他の形で死を迎えることになったはずなのです。

(2)スピリチュアリズムの死生観は、地上人類の「人生観」に根本的変革をもたらす

死の真相が分かると、地上人生に対する見方・考え方が根本から変化するようになります。すなわち人生観に革命が起こるようになります。死ぬことは自然現象の1つであって霊界に行くステップにすぎない以上、肉体を持った70~80年の人生は霊界における永遠の生活に比べたとき、ほんのひとコマであると位置づけられるようになります。では永遠の生活の中で、わずか100年に満たない地上人生の目的とは、いったい何なのでしょう。こうした視点で地上人生を見つめ、地上人生の目的、すなわち「何のために地上に生まれ、死んでいくのか」を明らかにした宗教・思想はありませんでした。

今、地球人類はスピリチュアリズムによって初めて、地上人生の意味と目的をはっきりと知ることができるようになりました。スピリチュアリズムが明らかにした地上人生の目的とは、次のようなものです。

①永遠の霊性進化の道のりのひとコマとして、霊的成長をなす

地上人生は、永遠の霊性進化（霊的成長）の道のりの、ほんのひとコマにすぎません。地上人生の最大の目的は、物質世界における体験を通して霊的成長の基礎をつくることです。地球はその意味で、霊的な訓練場所と言えます。霊的成長のために物質世界で奮闘努力する期間が、今の地上人生なのです。

したがって地上人生には、常に努力と自己との闘いが要求されることとなります。唯物主義的発想では、死ねばすべては無に帰す以上、できるだけ多くの本能的喜びを求めなければ損だということになりますが、そうした生き方はせっかくの地上人生を全く無駄にしてしまう愚かなことなのです。

②死後に訪れる霊界での生活の準備をする

地上人生は、物質世界で霊的成長をなし、本来の住処である霊界での生活の準備をするためにあります。霊的成長を促すような人生を送れば、それが自動的に霊界に行ってから準備となります。たかが100年に満たない地上での準備が、霊界における永遠の生活の出発点（生活レベル）を決定することになります。

その意味で地上人生を霊的成長のために費やすことは、きわめて重要なことなのです。

③霊界における本当の喜びと幸福を得る準備をする

地上人生は、物質世界での苦しみや苦勞の体験を通して、霊界での本当の喜びと幸せを得るためにあります。愛と美の満ちあふれる真の喜びと魂の充実、物質世界には存在しません。霊界に行ってからでないかぎり、そうした真実の幸福を味わうことはできないようになっています。霊界での本当の幸福を獲得するために、物質世界で一時的に苦勞するように神が厳しい環境を準備されたのです。霊的成長には、苦しみや奮闘努力が不可欠です。

したがって私たちは、苦しみや困難を避けようとするのではなく、反対にそれらを甘受し歓迎するようであればなりません。

④カルマを清算して、霊的成長の道をリセットする

また前世で「カルマ」をつくってしまった場合は、それを償い清算するために地上人生において苦しみの体験を経なければなりません。その苦しきは、霊的成長の道をリセットしてくれるありがたいものです。霊界における喜び・幸せを思えば、いつき

地上でどれほど苦しんでも構わないということになります。多くの人々は何とか苦しみを避けようとしてもがき、宗教に救いを求めますが、それは間違った生き方です。

霊界での永遠の喜びに満ちた幸せな人生のために、短い地上での苦しみや困難は希望を持って耐え忍ぶことです。死後に訪れる喜び・幸せのことを考えたなら、地上での苦しみなど、どうということはないのです。

3)スピリチュアリズムの死生観は、地上人類の「人間観」に根本的変革をもたらす

スピリチュアリズムは、人間が死によって終わる存在ではなく、神の分霊として永遠に生き続ける霊的存在であることを明らかにしました。そうしたスピリチュアリズムの死生観は、当然「人間とは何か？」というテーマに大きな影響を与えることになります。スピリチュアリズムがもたらした死生観は、地上人類の人間観に根本的変革をもたらすことになりました。

スピリチュアリズムが明らかにした「人間観(人間とは何か)」の内容は、次のようになります。

①人間は永遠に存在する「神の子供」

神の分霊として造られた人間には、個が消滅するような時期はやってきません。死とともに消滅してしまうようなことは決してありません。いったん創造された以上、地球ばかりでなく宇宙が消滅するような時がきても、人間の霊は永遠に存在するのです。人間の本体である「霊(神の分霊)」は神の子供であることを意味しますから、人間は永遠に存在する「神の子供」ということになります。これが人間の定義です。

②人間は、肉体を携えた霊

キリスト教に代表される従来の宗教でも、人間は霊を携えた存在であることを主張してきました。しかしそこにおける霊の認識は、せいぜい肉体に付属したものだという程度でした。人間とは、肉体と霊を持った存在、あるいは肉体に霊をくっつけたような存在といったものでした。「Body with spirit(霊を携えた肉体)」と考えてきたのです。霊があることは認めるものの、そのウエイトは小さなものでした。肉体が主で、霊は肉体の付属物といった位置づけをされてきたにすぎません。

スピリチュアリズムは、そうした従来の人間観を根底から覆しました。スピリチュアリズムの人間観では、霊のウエイトがとつもなく大きいものとされます。スピリチュアリズムでは人間を、肉体を携えた霊と定義します。これは霊が主体で、肉体は付属物ということです。「Spirit with body(肉体を携えた霊)」と考えるのです。肉体は霊の外皮であり付属物にすぎません。霊界ではそれがなくなり、純粋な霊的要素(霊・霊の心・霊体)からなる霊的存在となります。しかし地上にいても「霊」は本体・本自我であり、人間の中心なのです。

③人間と人間は、神の愛の絆によって結ばれた「霊的同胞」

人間は永遠に生き続ける霊的存在である、という認識を地球上のすべての人間に拡大して考えるとき、人間関係の本質が明らかになります。「人間と人間の間にはいかにあるべきか?」「他の人間をどのように考えるべきか?」——このテーマに対する最も適切で正しい答えが、2千年前のイエスによって示されています。その答えとは、「全人類は神の子供であり、霊的

大家族の一員であり、神を共通の親とする兄弟姉妹である」ということです。これは、まさに真実を言い当てています。ところがこうした真理が示されていながら、その意味することの重要性を理解・実感できなかったために、宗教同士で殺し合いをするといった悲劇が引き起こされるようになってしまいました。同じクリスチャン同士が、血で血を洗う悲惨な争いを繰り返してきました。

人間は死後も存在し続けるという厳粛な事実を深く実感したとき、「霊的真理」の教える世界が地上において実現することになります。すべての人間が等しい霊的存在であり、霊的同胞であることを心から実感したとき、初めて神のもとにあって同じ霊的兄弟姉妹となれるのです。スピリチュアリズムの死生観は、これまで観念的にとらえてきた“人類愛”をより明確にしました。地球人類が皆、神の愛の絆によって結ばれた「霊的同胞」であることを明らかにしたのです。

4)スピリチュアリズムの死生観は、地上の道徳・法律・医学に根本的変化をもたらす

スピリチュアリズムが明らかにした死生観は、地上の道徳や法律・医学に大きな変化をもたらします。ここではその中から現代社会が直面している“死”と関連するいくつかの問題を取り上げます。そのテーマは、自殺・人工妊娠中絶・死刑制度・臓器移植・安楽死・延命治療・尊厳死です。

①自殺

自殺は虐げられた人間の最後の抵抗手段であったり、憎しみを持った相手に対する復讐であったりします。また人生に対する絶望が引き起こす悲劇であることもあります。地球上では毎日、多くの人間が自らの生命を絶っています。これまでも自殺に対する是非がいろいろな形で議論されてきましたが、霊と死後の世界の存在を前提として論じたものではありませんでした。人間には永遠の「霊」と「霊界」がある以上、それを前提としないところで自殺について議論しても無意味なのです。自殺の問題は「霊的事実」の観点から見て、初めて解明されるようになります。

大半の人間は“自殺は悪いこと・してはならないこと”と考えていますが、もし人間が肉体だけの存在であって死とともに消滅してしまうものであるならば、自殺を悪とする根拠はきわめて乏しいことになります。いずれ人間は死を迎える以上、それを少しばかり早くしようが遅らせようが大差はないということになるからです。

自殺を間違いとする理由としてしばしば取り上げられるのが、残された遺族の悲しみ・心の痛手・迷惑です。しかしこうしたことは病死の場合であっても、程度の差こそあれ発生するものです。人間常識や道徳的な理由を根拠に自殺を悪と断じて、それほど説得力はありません。

自殺の間違いは、霊的に見ると明白になります。まず何よりも生命は自分自身のものではなく、神から与えられたものであるということです。神から与えられた生命を、自分勝手に捨てることは許されません。これが自殺の間違いの1つ目の理由です。

2つ目の理由は、地上人生というせっかくの霊的成長のチャンスを自ら捨て去ることで、永遠の進化の道に大きな損失をもたらすようになるということです。霊的成長という人間にとって最も大切なものを犠牲にしてしまうことは、神の摂理に反する行為です。

3つ目の理由は、死生観に直接関係する内容です。それは自殺しても死ぬことができないどころか、死後にはいっそうの苦しみが生じるようになるということです。地上にいたときには自殺をそれほど悪とは考えていなかった者も、霊界に入ってみると自分の犯した行為の間違ひの大きさを知ようになります。自ら霊的成長の道を閉ざしてしまったことの重大さをひしひしと実感し、“後悔の地獄”の中に突き落とされるようになります。

以上のような理由から、自殺は許されません。自ら命を絶つことは間違いなのです。それは霊界という永遠の世界の存在を無視した愚かな行為、無知から出た摂理に背く行為なのです。

とは言ってもすべての自殺が、同じ罪悪性を持っているというわけではありません。キリスト教では、いかなる理由であっても自殺は悪であり決して許されない行為であると断定します。確かに自殺は摂理に反した間違った行為ですが、自殺の中には情状酌量すべきケースが多々あることも事実なのです。すなわち同じ自殺であっても、動機や状況によってはそれほど悪とは言えないケースもあるということです。

自殺は霊界という霊的事実をないがしろにした無知からの行為ですが、「いかなる動機から自殺に及んだのか？」という点において、評価は全く違ったものになるのです。当然、自殺者一人一人の死後の状況は、動機の内容によって異なることになります。人々を救出するために敢えて自分の命を犠牲にしたような場合は、悪どころか立派な利他愛の行為となります。言うまでもなくそうした奇行が霊界に行ってから苦しみや咎(とが)めをもたらすようなことはありません。

②人工妊娠中絶

胎児の生命を奪うことは、いかなる理由があるにせよ殺人を犯すに等しいことです。生命は神のものであり、神が人間に与えたものなのです。それを人間の勝手な理由で奪い去ることは許されません。これが「人工妊娠中絶」が罪であることの最大の理由です。胎児の中には、神の分霊である「霊」が宿っています。その点においては、私たち人間と何ら変わらないのです。

胎児霊は、霊的成長やカルマ清算という目的のために地上への誕生のチャンスを求め、やっとそれが聞き入れられたのです。妊娠の背景には、こうした深い霊的理由が存在します。中絶によってそうした他人の重大事を一方的に捨て去り、霊的な大打撃・大損害を与えることは罪以外の何物でもありません。これが中絶が間違いである2つ目の理由です。

3つ目の理由は、死生観に直結する内容です。中絶によって肉体という物質の乗り物(道具)を失った胎児霊は、未熟な霊体を身にまとい新しい生活を始めなければなりません。当然、再生前に予定していた地上世界での体験はできなくなるため、再度生まれ直す必要が生じます。どうしても地上に生まれる必要がある霊は、別の機会を待つこととなります。それは霊にとっては無駄な遠回りとなるのです。

地上では、他人の財産を少し奪っただけで大騒ぎになります。他人の命を奪えば裁判にかけられて刑を執行され、辛い日々を送らなければならなくなります。それと同じようなことをしながら、中絶の場合はやり過ごすことができるのです。霊的な観点から見れば中絶は、殺人と同じ罪を犯していることなのです。そしてその罪は、霊界に行ってから償わざるをえなくなります。以上のような理由から、人工妊娠中絶は間違いなのです。

とは言っても自殺の場合と同様に、すべての中絶を一律に断罪することはできません。情状酌量しなければならないケースが実際に多くあるからです。どこまでも動機がその決め手となります。どのような動機で中絶に至ったのかが問題となるのです。例えば母体を生命の危機から守るためにした中絶に悪性はなく、それが罪となるようなことはありません。それとは逆に本能的快楽を追求した結果、子供は邪魔だという勝手な理由から中絶するようになった場合には、利己的行為の極みとして、一切の言い逃れも言い訳もできないような状況に置かれることになります。

* 人工妊娠中絶は生命を奪う殺人で許されませんが、避妊による産児制限はこれとは全く事情が違います。もちろんどのような行為も、常にその動機が問題となることは言うまでもありません。経済的理由や母体の健康上の理由、その他の正当な理由で産児制限をすることは決して摂理には反しません。

③死刑制度

現在先進国では、「死刑制度」は徐々に廃止されつつあります。それは地球人類の進歩と言える嬉しい動きです。しかし米国や日本のように先進国でありながら、いまだに死刑が執行されている所もあります。霊的観点から見れば、死刑は国家による公認の殺人であり、国家は罪をつくり続けていることとなります。これまでも死刑制度をめぐる、さまざまな議論が巻き起こってきました。その中には死刑の存続に一理あるような意見も確かにありましたが、霊的事実からすれば死刑は、やはり間違いなのです。やめなければならないものなのです。

死刑制度の容認派は、決まって「死刑によって極悪犯罪が抑制されるようになる」と主張します。しかし実際には死刑制度があっても、犯罪がなくなるようなことはありません。死刑を減らすには、一人一人の人間の考え方と、社会全体の意識が変わる必要があります。「物質至上主義」と「利己主義」の蔓延が、犯罪を増大させることになっているからです。犯罪発生の根源にメスを入れないかぎり、死刑という“罰”をちらつかせても犯罪を減らすことはできません。

スピリチュアリズムは、死刑制度の間違いを霊的事実の観点から明らかにしています。それは死刑によって生命を奪われた犯罪者が、死後も霊として生き続け、憎しみを募らせてさらなる悪事を行うようになるということです。死刑は犯罪を減らすどころか、憎しみの感情を煮えたぎらせた“低級霊”をつくり出し、厄介な霊的問題を引き起こすこととなります。こうした霊的事実から見ると、死刑制度には何の効果もないことが分かります。死刑制度は、地球人類の「霊的無知」から発した間違った制度の1つなのです。

④臓器移植

21世紀の地球上を支配している西洋医学は“唯物主義”を土台としています。そこでは当然のこととして、死後の生命や霊界の存在を認めません。“人間とは肉体である”との認識のもとで、死ねばすべてが消滅すると考えています。そうした唯物医学では、寿命を延ばすことが医学の最大の目的となっています。肉体生命にこそ最も価値があると考えられているからです。した

がって病気を治して死を先に延ばすことができれば医学の勝利となります。反対に病気によって死に至るならば医学の敗北ということになります。

現代医学は、少しでも肉体生命を長引かせる方向にエネルギーを傾けています。現在「臓器移植」が医学の最前線の位置に置かれているのは、こうした背景があるからです。時にはそれが暴走して、お金で他人の臓器を買ったり、大金を投じて海外で臓器移植を受けるといった問題を引き起こすようになっていきます。そこには“死は恐ろしいものであり最大の不幸である。少しでも先延ばしにすべきものである”といった共通認識があります。

しかし霊的事実に照らしてみると、そうした医学は明らかに的外れと言わざるをえません。死は決して悲劇ではなく、それどころか歓迎すべき素晴らしい出来事であるからです。したがって治療の限界に至ったときには、霊界に思いを馳せ、死を静かに受容すればよいということになります。医学関係者の中には、病人を助けたいという純粋な動機から、ひたすら研究に取り組んでいる人もいます。そしてこれまで実際に多くの人命を救い、人類のために多大な貢献をなしてきました。

しかし、それをもって現代医学のすべてを容認することはできません。そうした貢献とは別に、病人には死の本当の意味を教え啓蒙することが重要なのです。肉体は死んでも霊として生き続けること、死は新しい世界への出発であることを知れば、臓器移植をしてまで肉体生命をむやみに引き延ばそうとする考え方の狭さと間違いに気がつくようになります。

⑤安楽死・延命治療・尊厳死

安楽死

ガンの末期患者など医学的に見てもはや治る見込みがない病人を、耐えがたい痛みや苦しみから一刻も早く解放してあげするために医学的処置を講じて死に至らせようとする場合があります。これが「安楽死」です。現在、この安楽死の是非をめぐって議論がなされています。海外では、すでに安楽死を法的に認めている国家もあります。安楽死は、患者を少しでも早く楽にしてあげたいという思いやりの気持ちから出たものであり、その動機には一点の利己性もないことは明らかです。それゆえに多くの人々の賛同を得ているのも当然と言えます。

しかし「安楽死」という死に関する問題は、霊的観点から見ないかぎり正しい判断はできません。スピリチュアリズムでは、霊的事実に照らして安楽死は間違いであるとしています。それは、生命はどこまでも神のものであり、神から与えられたものだからです。人間のものではない生命を、人間の手によって勝手に葬り去ってはならないということなのです。これが安楽死の間違いの第一の理由です。

安楽死が間違いであることは、次のような霊的事実からも明らかにされます。物質的視点からすれば安楽死には何の問題もないどころか、利他愛として容認されてもおかしくないものです。しかし死の直前でただ単に無意味に苦しんでいるように見える状況であっても、その実、生きている意義がないわけではないのです。患者は瀕死の苦しみを通してカルマを切るプロセスを歩んでいたり、地獄のような苦しみの体験の中で何らかの霊的学びをしていることがあるのです。生命は摂理によって支配されている以上、いかなる場合であっても、死は自然の成り行きに任せるべきなのです。それを人間的な判断で故意に早めるならば、不自然な状況・霊的支障が発生するようになります。これが安楽死の間違いの2つ目の理由です。

延命治療と尊厳死

安楽死と反対の位置にあるのが「延命治療」です。死に至ることが明らかな患者に対して医学的処置を施し、少しでも死期を延ばそうというのが延命治療です。現在の医学では、こうした延命治療が当たり前に行われています。全く治る見込みのない末期の患者が、延命装置で何日間か生き続けることがあります。それによって、さらなる苦しみ・痛みの体験が長引くこととなります。

このように考えると延命治療は、ある意味で無慈悲な行為のように思われます。どうせ死ぬ以上、無理やり生かすようなことはせずに早く苦しみから解放してあげたいと思ったとしても当然です。「尊厳死」の発想はそこから出ています。死ぬことが分かっている患者を、無理やり機械で生き長らえさせるような不自然なことをせずに“自然にあの世に旅立たせてあげたい”という尊厳死の考えは、人情的に見てきわめて当たり前の在り方と言えます。

この「延命治療」と「尊厳死」の問題に対してスピリチュアリズムでは、どのように考えているのでしょうか。結論を言えばスピリチュアリズムでは、不自然であっても延命治療を一応認めるのです。しいて延命治療を否定はしません。寿命は摂理によって決められるものである以上、延命装置で死期を延ばすことには限界があります。死期がきていれば、どれだけ延命装置を働かせても生き続けることはできません。まだ寿命が残されている場合にのみ延命装置によって生き長らえることができるのであって、延命装置によって寿命が延びるということではないのです。“生き続けている”ということは、まだ寿命が尽きる時がきていないということです。延命装置によって数時間・数日、寿命が延びたならば、それも寿命のうちということなのです。もっとも自然死も延命治療による死も、結果的にはそれほど大きな寿命の差はありません。スピリチュアリズムでは、延命治療に特に意義は認めませんが、敢えて止めるほどの理由もないと考えます。どこまでも生命の尊厳性を最優先するということなのです。

したがって自然な死に方をさせてあげたいと思って延命装置をはずしたとしても、摂理には反しません。尊厳死も問題はないということです。一般的には延命治療と尊厳死は相反する立場にありますが、スピリチュアリズムでは、どちらも問題はないということになります。